

換金作物を栽培するマヤ系先住民の行動原理に関する事例研究

誌名	農林業問題研究
ISSN	03888525
著者名	中田,英樹
発行元	富民協会
巻/号	39巻1号
掲載ページ	p. 24-35
発行年月	2003年6月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



換金作物を栽培するマヤ系先住民の行動原理に関する事例研究

中 田 英 樹*

A Study of Behavior of the Indigenous Mayan People who Cultivate Coffee as a Cash Crop

Hideki Nakata* (Kyoto University)

Many previous studies have explicated the behavior of the people of peasant societies in Southeast Asia by adopting one of the two well known models, either the "moral economy" conceived by James C. Scott or the "political economy" by Samuel L. Popkin. The purpose of this paper is to provide an economical and anthropological discussion on the process of the introduction of coffee cultivation by the indigenous peasants of Guatemala. This paper has chosen the case of the people of San Pedro La Laguna, Sololá province, on the western highland of Guatemala. In chapter 1, as a theoretical position to analyze the case the dispute between "moral economy"

and "political economy" is applied to the Guatemalan situation. Also discussed is the "closed corporate peasant community" concept by Eric Wolf, compared to the concept of "penny capitalism" conceived by Sol Tax concerning Panajachel village of Guatemala. In chapter 2, the process of coffee introduction in San Pedro is investigated, and the current situation of this village is presented. In chapter 3, five local habitants give their comments as to what extent their cultivation is based on the reason that "coffee cultivation brings profits". In the final chapter, the opposing views are discussed and interpreted based on their comments.

1. はじめに

本稿の課題は、中米グアテマラ共和国のマヤ系先住民村落、サン・ペドロ¹⁾を事例にとり、村人たちがコーヒー栽培を展開してきた過程について、経済人類学的な考察を加えることにある。先行研究においてグアテマラ先住民の行動原理は、伝統的な共同体の規範に基づくとしたモデルか、あるいは経済合理主義的なモデルによって説明されてきた²⁾。対し本稿では、栽培に関わる諸個人の動的なプロセスに踏み込むことで、この両モデルのどちらかを選択して捉え切ろうとすることの限界を探ろうというのである。まず 2. では、国家施策として導入されたコーヒー栽培が先住民共同体に及ぼした影響をめぐっての、先行研究を紹介する。続く 3. で、事例村落でのこの変化について略述するとともに、今日

での栽培状況を述べる。4. では、零細ながら栽培を営んできた村人への聞き取りを紹介し、その栽培の営みがどのように「合理的」なのか、5. で筆者なり

2. コーヒー栽培と先住民共同体

(1) 農業資本主義の確立と先住民共同体の対応

グアテマラにおいて、マヤ系先住民が占める人口比率は 6 割とも 7 割とも言われており、ほとんどが中西部に広がる山岳地帯(図 1 参照)に暮らしている。

この人たちは 21 のサブ・カテゴリーから構成され、各々で言語は異なる。各々の村で、人びとは共同体を形成し、トウモロコシの自給栽培を軸に伝統的な生活を営んでいた。

さて、十九世紀末のバリオス大統領の強権政権下、コーヒーを始めとする輸出農業を活性化させようと、従来の前資本主義的な生産様式を解体す

* 京都大学大学院農学研究科

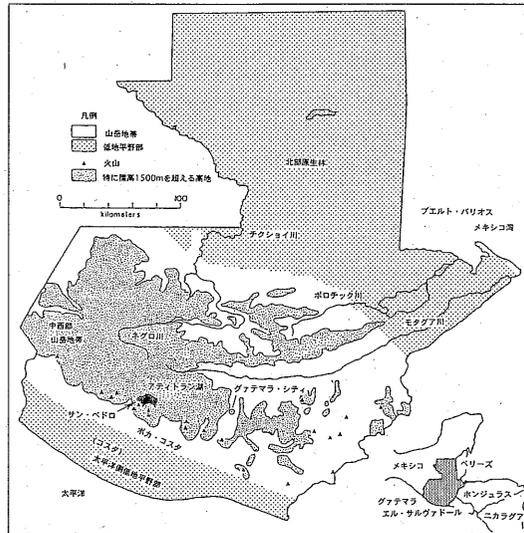


図1. グアテマラ概観図

資料：Smith 1990a, p. 8, map 1 をもとに作成。

るべく、土地、資本、労働力を流動化させ農業資本家のもとへ集約させる諸施策が施行された (Cardoso y Pérez 1977, pp. 216-218; McCreery 1994, pp. 161-194). その結果、南部の平野地帯が大規模農業地帯へと転化した。まずコーヒーが、続いて二十世紀に入っては、コーヒーのモノカルチャーを嫌った政府によって、綿花やサトウキビなどが展開された (Cardoso y Pérez 1977, p. 272).

政府は、この南部に広がる農業資本主義システムに先住民を囲い込もうとしてきた。しかし結果的には、先住民たちに山間部の共同体を捨てさせるには至らなかった (McCreery 1990, p. 106). 先住民たちはトウモロコシの農閑期に適宜山を降り、出稼ぎ季節労働者となったのである。トウモロコシの自給栽培にあくまでも基づきながら、僅かの現金収入を得るため賃金労働に従事する。後から見れば、農園主にとってもこれは好都合であった。先住民たちが自給生活をベースとしているため、共同体内の物価水準は上昇せず、労働を再生産させる費用が安くついたからである。また、共同体内の人口が増加するにつれて自給栽培用の農地は細分化し疲弊する。本来なら共同体は構成員を支えることが困難になって行くはずが、南部でのコーヒー栽培の普及によって、先住民たちは伝統的な生活を維持し得たのである。こうした状況が少なくとも二十世紀半ばま

では続いた、というのが先行研究での一致した見解である³⁾。

(2) ウルフの「閉鎖的集合農民共同体」

南部より拡大しつつあるコーヒー栽培が山間部にまで浸透しなかったのは、共同体の側から見れば次のような性質が強く影響していた。ウルフが「閉鎖的集合農民共同体」と呼んだものである (Wolf 1957, pp. 1-18). つまり村には、ある特定の誰かが突出して富を蓄積しないようなメカニズムが働いていた。カトリックのヒエラルキーに基づいた宗教組織と、村の地域活動組織が一体となった、コフラディア *cofradía* と呼ばれる組織によって村社会は構成されていた。コフラディアにはコストウンブレと呼ばれる活動が付随する。共同体の構成員は、このコフラディアのヒエラルキーの上にあがろうとするならば、コストウンブレの際に多くの財を供出しなければならない。人びと、特に成年男子の行動原理は、資本を蓄積することに基づいてはいなかった。コフラディアが構成する村社会に散財し、より上位を目指すことにあった。そしてこのメカニズムを維持すべく、共同体では、変化を与える外部からの諸影響はブロックされてきた。ウルフの論を踏まえポールは、二十世紀半ばのサン・ペドロ村民に対して、次のように行動の合理性を見いだす。

当時 [20 世紀半ば] の社会構造は、ムラ社会活動と宗教が組み合わさったひとつのヒエラルキーを成しており、その維持に村民は生活を捧げ、見返りは受け取っていない。それはサン・ペドロ人としての義務であったし、公共の目がそうさせていた。また、付随する儀式は、畑での一本調子な労働に心地よい緩和をもたらしていたし、何よりも尊厳深い役職を満喫する権力と威厳の見返りがあった。生きる目的も明確だったし、生きる道は決まっていた (Paul 1968, pp. 152-153) (本論 [] 部は全て中田)。

(3) 浸透するコーヒー栽培

こうした共同体の閉鎖性・伝統性は、革命政権期 (1944-1954) を契機に弛緩する場合もあった。カンシアンは次のように述べている。19 世紀末にコーヒーがバリオス独裁政権下で導入されて以降、カブレラ政権、ウビコ政権など独裁性の強い政権が続いた。これら諸政権下で先住民たちは、南部での労働へと強制的に駆り出されていた。非先住民/先住民の関係は、きわめて不平等なもので、先住民たちは抑圧され続けていた。この時代では、先住民は抑圧的な非先住民に対して自らを守ろうと、より共同体の閉鎖性を強化するのである。しかし革命政権の成立によって、支配的な非先住民文化は先住民たちにとって敵視すべき存在ではなくなった。そこから共同体の閉鎖性も弛緩し、人びとの生活のさまざまな局面において、多様なオプションが開かれることとなったのである (Cancian 1967, pp. 294-295)⁴⁾。

この革命政権期を経た 20 世紀後半、いくつかの山間部農村では、南部のように大規模ではないにせよコーヒー栽培が展開されるようになってきた⁵⁾。今日では零細コーヒー栽培者は約 5 万人と見積もられている (SNU 1999, pp. 145-146)。コーヒーは、他のトマトやタマネギといった換金作物のように恒常的に水撒きをする必要がない。山岳地帯でも、標高 1800 m 位までの所ならコーヒーは育つ。たしかにコーヒー畑を新たに開墾すれば、植樹から 4-5 年くらいは収穫がないうえに幼木も弱く、除草や肥料散布など手が掛かり農園主は損をするばかりである。しかし一度収穫ができるようになれば、後は十数年間、僅かの手入れのみでかなりの現金がもたらされるのである。ゆえに先住民たちが、山間の斜面

でのトウモロコシをやめるならば、その畑で栽培可能な換金作物はコーヒーしかほぼあり得ないし、最も世話のかからない有力な選択肢なのである。このことから、与えられる説明はほとんどが次のようなものである。つまり、零細栽培であってもコーヒーを栽培すれば、①経済活動を多様化し、かつその価値の底上げをもたらす。②土地の収益をあげる。③雇用創出にもつながる。④例え微々たる規模であっても、コーヒーがもたらす収入は農民の地域生活での経済水準を上昇させる (SNU 1999, p. 146)。だから山間部でも、村人たちがコーヒーに乗り出すのは当然だ、というわけだ。だがこうした指摘では、先述した先住民のコーヒーとの歴史的関係はおろか、栽培者に先住民が含まれることも一切踏まえていない。

(4) タックスのパナハッチェル分析

コーヒーを栽培する先住民たちを、彼らの歴史をも踏まえて考察しているのは、パナハッチェル村 (図 2) を事例としたタックスの論がほぼ唯一であろう⁶⁾。この地域は、山間部幹線道路網と湖畔の諸村落との中継地点であることから、外部からの諸影響が強く働く地理的環境にあった。さらに非先住民の混住も早くからすすんでおり、コーヒーは二十世紀前半から浸透していたのである⁷⁾。このパナハッチェルに暮らす先住民たちを、タックスはもはや伝統的な行動規範に基づいていないと説明する。つまり先住民たちは、村のコフラディアを維持するために日々を暮らしているのではない。この先住民たちは、生産と消費の両側面において、家族単位での経済主体を構成している。そしてこれは、競争原理の強く働いた市場に結びついているのだ (Tax 1953, p. 13)。彼はこれを「1. ペニー資本主義 penny capitalism」と概念付ける。つまり、1 ペニーの規模であっても、先住民たちの行動規範は資本主義のそれに他ならない、というわけである⁸⁾。

彼は、パナハッチェルのような先住民がグアテマラ・レベルで見ても決して例外的ではない、と位置づけるものの (Tax 1953, p. 11)、同時に一方で、近隣諸村落での平場の優良農地に依然としてトウモロコシが栽培されていることに、次のような合理的説明を与える。

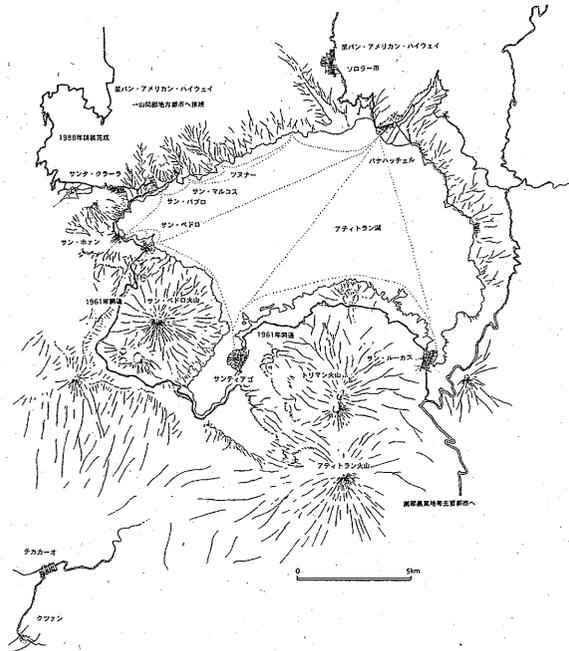


図2. アティトラン湖畔地域概略図
資料：McBryde 1945, map 20 をもとに作成。

私の知っている他のあらゆるところでは、平らな農地はトウモロコシに利用されている、そしてそれには傾斜地の方が遙かに好まれている。〔中略〕理由は明らかだ。先述の換金作物〔コーヒー〕で得られるお金で、同じ土地にトウモロコシを植えるよりも多くのトウモロコシを買うことができるからである。確かに先住民たちは一般的にトウモロコシ畑を所有するものの、〔平らな農地で換金作物を栽培して手にする〕儲けを犠牲にするほど、感傷的 sentimental にトウモロコシとは結びついていないのである (Tax 1946, p. 3)。

このようにタックスは、コーヒーを栽培する先住民のみならず、トウモロコシ栽培に立脚した先住民に対しても経済合理性をあてはめる。たとえトウモロコシが栽培されていても、コーヒーなどの換金作物に転作することが選好されている、というわけである。そこではコーヒー栽培が「儲かる」ことを経験していない先住民もまた、機会費用に準拠する経済合理の枠組みに回収される。したがって、いかなる対象も固有の文脈を削ぎ落と

され還元されゆくこの経済合理的なモデルが、過度に一般化され単純化されたそれとなることは、タックスの論が孕む必然的な問題点であり、これまでも批判の対象とされてきた (AVANCSO 1999, pp. 4-7)。本論もまた、この点を問題視している。

とはいえ次節に触れるように、今日のサン・ペドロ村民は最早トウモロコシ栽培を不可欠とせず、ほぼ完全にコーヒー栽培に立脚するようになっていく。たしかにこの限りにおいては、二十世紀半ばにタックスが「1ペニー資本主義」を見いだしたパナハッチェルの先住民と通底するものがある。さらに筆者の聞き取りにおいても、サン・ペドロのコーヒー栽培者たちは、栽培を「儲かる」ことを基準に乗り出し、続けてきたと述べる。しかし本稿は、コーヒー栽培に根ざすようになった人びとに対して、タックスのように即座に自らが持ち込んだ“先進社会と同じ経済合理的行動規範”を当てはめることを保留し、栽培者各々にとっての「合理性」に少し立ち入ってみようというわけである。

とはいえその前に、サン・ペドロにおける今日のコーヒー栽培状況を説明したい。

3. コーヒーの先住民共同体, サン・ペドロ

(1) サン・ペドロの概略

サン・ペドロは総世帯数約 1500 (INE 1996, p. 72), 現在人口約 1 万の村で, 村内人口の約 97% がツトゥヒル Tz'utujil と呼ばれるマヤ系先住民民族である (FUNCEDE 1997, p. 4). コーヒー栽培がこの村に浸透するまでは, サン・ペドロの人びとも他のマヤ系先住民たちの例に漏れず, トウモロコシと豆類の栽培を軸とした自給的な生活を送っていた. 先に触れたポールの描写である (Paul 1968, pp. 152-153).

とはいえサン・ペドロに特徴的なのは, その当時からさまざまな好条件に恵まれ, 人びとの生活手段が多岐に渡って存在していたことである. まず, サン・ペドロもパナハツェルと同様, 山間部と南部平野部との中継地点にある. 山間部でしか生産できないものと, 南部熱帯地域でしか得られないものの両方を扱えるため, 多くの商人が広範に活動していた⁹⁾. したがって, コーヒー栽培がサン・ペドロに導入される以前から, 比較的サン・ペドロでの生活は安定していた (McBryde 1945, pp. 88-120).

(2) 「閉鎖的共同体」から「1 ペニー資本主義」?!

1950 年代に既にコーヒーは, 村内へ持ち込まれていた. しかし, 筆者の聞き取りを総合すれば, 村の隅々にまで栽培が浸透したのは 1970-80 年代であろうと思われる. 少なくとも内戦 (1956-1996) 終結以降には, もはやトウモロコシは自分で作るものではなく買うものとなっている¹⁰⁾.

現在, 聞き取りによれば, 総世帯数の 85-95% の家庭が僅かではあってもコーヒー畑を持っている. 若い結婚したばかりの夫婦や, 父親がアルコール中毒だといった問題を抱えた家庭以外は, 必ずコーヒー農園を持っていると, 多くの村人が言う. 所有耕地面積は, 数クエルダ¹¹⁾ (以下, “c” と略記する) から数十クエルダというのが殆どである.

農業からの収入のみで生計を立てている世帯の割合は, 多くの人が 40-50% と見積もるが, 定かではない. 駄菓子屋, 雑貨屋, 衣服店等々, 自宅を小さな店としている家が多いし, 小学校の先生やバスの運転手でも, コーヒー栽培からの収入の方が多い場合もあるからだ.

村内は大きく次のエリアに分かれていると言える. (1) 市街地: この数十年, コーヒー経済がもたらした物価上昇により, 家々の密集する市街地の地価はきわめて高価である. (2) 湖畔地域: 人工撒水が可能のため, トマトやタマネギが栽培されている. (3) 周辺の標高が高い地域: 気温が低いのでコーヒーは育たず, もっぱらトウモロコシが栽培されている. (4) 共有林: サン・ペドロ火山の一定標高以上は, 私的所有が認められていない, いわば共有林となっている. 村人は薪を取る程度の伐採は許されているが, 建築用資材などの伐採はできない. (5) 周辺の標高が低い地域: かつてはトウモロコシが栽培されていたのだが, 今日ではほとんどがコーヒーである. たまにトウモロコシ栽培も見られるが, これはより美味しく地元産を好む家庭が栽培するからである. 村内で売られているトウモロコシは南部から持ち込まれたものであり, 質が悪いというのが村の評判である.

なお, 近隣町村でのコーヒー栽培は, サン・ルーカス, サンティアゴではサン・ペドロより古くから展開している¹²⁾. これは町内に大農園が存在することが影響しており, 現在では先住民をも含めた零細栽培も展開されている. サン・ペドロから西側の町村に関しては, サン・ホアンでは現在, ほぼ全域に渡ってコーヒー栽培が展開している. サン・ペドロから徒歩十数分と近いこと, さらに二十世紀初頭からサン・ペドロの人びとがサン・ホアンの農地を手広く購入して利用してきた¹³⁾ ということが影響している. サン・ホアンから湖畔村落を離れていけば離れていくほど, コーヒー栽培は珍しくなるが, いずれの町村でも徐々に栽培は広がりつつある.

4. サン・ペドロのコーヒー栽培者たち

以下, 「コーヒーは儲かるから [コーヒー栽培に乗り出した]」ということ, 聞き取りをもとに個人レベルで見えていく¹⁴⁾. ポイントは, 各々がどのように儲かっているかを, 客観的に捉えるべく正確なバランスシートをつくることにはない. 栽培者各々が「儲かっている」と自らの栽培を説明するとき, その合理性が各々にとってどのように合理的か, ということに踏み込むことにある. そして結果的に, 次節に取り上げる人びとは

「非専門農家」——つまり農業以外にも生計を立てる術を持っている人たちとなった。そして同時にそれは、村内では比較的裕福な人びとである。

本稿は、「儲かるから栽培を続けている」という、一見したところ経済合理的な行動規範を再検証することにある。これに対し例えば村内の27歳貧農は、筆者の「コーヒーが儲かるとは確かでしょうか？ 価格も不安定ですよ」という質問に対して、「わかりません。とにかく人生はたたかって luchar がなくてはならないし、少しづつでも貯めていかなければなりません」と答えるのであった。コーヒー経済による諸影響のために、現在のサン・ペドロで現金収入は不可欠である。コーヒー栽培（あるいはごく限られた野菜類の換金作物栽培）のみでしか現金収入の手段を持たない「専門農家」にとって、コーヒー栽培に乗りだし展開することとは、積極的な自己決定ではなく、追い込まれての従属的な選択であるように思われた。対して以下に取りあげる人びとは、コーヒー栽培以外にも生計を立てる術を持っており、それでもなおかつコーヒー栽培を展開している。そこで何らかの積極的な合理的意味付けがなされる傾向にある。

もちろんこうした「非専門農家」であっても、次節のP氏のように、特にこだわった考えを抱くことなく現在に至っている人が大半である。本稿が注目するR氏、G氏、F氏、C氏は、相対的にきわめて希なケースであることは否めない。しかしそれらが示唆することは一考に値すると思われる。

(1) P氏 鉄筋工・溶接工・教会牧師 男・40代

現在、息子と二人で鉄筋細工や溶接細工をしている。現職に至るまでに彼は、大工を4-5年、左官屋を20年、パン焼き職人を6年、漁師を1年と多様な職歴をもつ。一方で彼は、町の隅にあるプロテスタント福音派 evangélico の牧師を19年間努めている。

多くの人びとと同じように、彼も「何故コーヒーをやっているかって？ 儲かるからだ」と言う。しかし聞き取りをした数十名のうち、彼のみが前年度のコーヒー収穫量すら覚えていなかった。これに始まり、彼はほとんど自らの栽培状況に関して無関心である。「農民がやっているみたいにもっと世話をすれば収穫も上がるが、オレには関係ない」「ある日知り合いが、コーヒー農園を買っては

どうかと持ちかけてきたから買ったのだ。それ以上の意図はない」「コーヒー農園を買ったのだからコーヒーをやっているだけだ。儲かる儲からないかはどうでもよい」と言い、すべてを農民に任せ、自らが農園に出向くこともほぼ皆無である。筆者が、「どうせ任せるとしたら、もっと頻りに農民を雇い世話をして収入を増大させてはどうですか」「そんなズサンな経営で、この先コーヒーの価格が下がったらどうしますか」などと問うても、「儲からなくなったら全部木を切って薪にするだけだ」「そうして儲かる、儲からないなどいつも考えているから日本人は夜によく寝れないのだ」と笑い飛ばすのであった。

決して彼は、金銭に無頓着でなければ金儲けに興味がないわけでもない。作業場での彼は、さまざまな工夫を作品に込め、経営もきわめて精確である。コーヒーでは全く対照的なのだが、それでも「とにかくやっている」のは、損はしていないという確信が強いからだと思われる。

彼ほど自らの栽培状況に無関心な人は珍しいにしても、多くの「非専門」農園所有者は、農園にはほとんど行かないか、行っても農民がサボっていないか、チェックするのみである。コーヒー栽培の技術的な知識もあまり備えてない場合が多い。家計の余裕と照らし合わせて、適当に農民を雇い、農業散布や除草などの手入れを数回多くしたり減らしたりする程度である。

(2) R氏 レストラン経営・画家・教員 男・50代

とはいえ、当然のことながら細かく踏み込んで「儲かる」ことを計算する人たちも存在する。学校教員など、教育を受けた人ほどこの傾向は強く、例えばR氏などはコーヒーがもたらす収入を最も厳しく評価している人である。

彼は画家で、描いた絵を自ら経営するレストランで展示して売っている。アメリカ合衆国の友人も米国内のギャラリーやインターネットで彼の絵を売っている。レストランは妻などに任せているので、絵を描かないときは小中学校の教師を隣町でしており、村では比較的裕福な家庭である。「職業は、と聞かれればコーヒー栽培も含めるべきかなあ」と、かなりコーヒーに関わっている。この4-5年間に、合計21cのコーヒー農園を総額数万ケツァール〔グアテマラの通貨単位。以下、“Q”

で略記. 約 Q8=1US\$) を投じて購入している。

さて、専属農民を三人雇うという点から見れば、サン・ペドロでは比較的大規模栽培だといえる。だが、彼の厳しい経営評価は、次のような経営基準をはじき出す。「コーヒーの価格、1 キンタール [100 ポンド. 約 46 kg. 以下 qq と表記] 当たり Q100 が私の許せる最低ラインだ。農民には必ず 1 日 Q25 が出ていく。私が儲けようが儲けまいが、Q100/qq なら私の手元に Q25/qq 残る。このラインを切れればコーヒーはやめて土地を売るつもりだ」。

Q100/qq というのは、2001 年までの価格変動が Q110-130/qq であったことを考えれば、容易に割り込む可能性のある数値である。しかしそれでも彼は、儲かることへの信頼を維持している。これは彼に、次のような考え方があったからだ。「グアテマラでは不動産の高騰 plusvalía があり、土地は決して下がらない。つねに少しずつ上昇しているのだ。対して [側にあった冷蔵庫を指して] 器具は千で買っても千以上で売ることはいできない」。

彼は、「[良い値が付かない年には] 農民の方がコーヒーで儲けている」というように、彼はコーヒーがそれほど利益をもたらすものではないと主張する。それでもなお彼がこの規模で栽培を続けるのは、土地という不動産の価格上昇を確信しているからだと言っている。

「コーヒー栽培は儲かる」ことを確信するプロセスに絡んでいる、土地というものに注目したい。踏み込んだ解釈は終節で行うとして、もう少し「儲かるから」という合理性に絡む土地というものを、他の人の例に見てみよう。

(3) G 氏 スポーツ用品店経営 男・40 代

彼は、土地そのものを完全に商品と見立て、コーヒーにではなく土地の売買に利益を求めている。15 歳頃から衣服の行商を始め 20 代半ばに現在の店を構えて以降、徐々に行商をやめていった。1970 年代にまずは父から譲り受けていた 1 c の一筆に少し現金を上乗せして、サン・ホアンに 2.5 c のコーヒー農園を買った。サン・ペドロにより気に入った土地の提供があったので、84 年にこの 2.5 c を約 5 倍の価格で売却。さらに、相手から不足分としてサン・ペドロの一筆をもらう。この一筆も 90 年に約 8 倍の価格で売却。現在に至るまで、彼は売却を十件弱繰り返している。

今日では、より高い値で売ることから意図して購入している。しかしもちろん、最初は違ったと言う。「最初はあちらで提示があって気に入れば、その金を調達するためにこっちを売った。こっちでまた別のが気に入れば、あっちを売らなければならなかったが、その時には当然より高い値で売ろうとする。そして事実、高い値で売れた。こうして繰り返すうちに気付いた」のだ。

現在サン・ペドロでは、土地の売買でマージンを稼ぐことに身を投じている人は 3-4 人いるが、彼以外は、外国人が別荘を建てるのに気に入るような湖畔の土地を同じ地元民から購入し、それを相場を知らない外国人に高くふっかけるというスタイルを採っている。対して彼が扱うのはコーヒー農園であり、売却相手は同じ地元住民である。彼は特に、栽培が放棄されかかっている荒れた畑をまず探す。「良い農地は値下げ交渉が難しい」からである。彼が言うには「人は土地の価格を見た目で判断するので、荒れた土地はたいてい何回か商談がつぶれている」。「売却側が容易に値を引いてくる」荒れ地を、彼は購入し、直ぐさま農民を雇って立派な農園に改良する。

売却までの期間、彼はその土地に農民を雇いコーヒーを栽培し、さらに彼自身赴いて世話をする。コーヒー畑として良いか否かは、気温、日照条件、水はけ、土壌、害虫の付き易さなど、さまざまな要因が絡む。よって、実際に栽培をしない限りその畑が優秀な収益をもたらすかは判らない。彼は、実際に荒れた畑をコーヒー畑とした後に、予想以上の収益が得られることが判った畑については、売却を急がず、じっくりと毎年のコーヒーの実がもたらす収益を確保している。とはいえ、彼がコーヒー栽培に関わっていることの、最も主要な動機は、コーヒーを栽培しその収穫物を持って得られる収益ではない。確かに彼にとってコーヒー経済がサン・ペドロで活性化することは重要である。しかしそれはあくまで、コーヒー栽培で儲けることができる農園を売買して利益を得るためである。

彼らにとって、「儲かるから栽培を続ける」という合理的行動基準には、土地というものを無視して考えることはできない。この R 氏、そして G 氏が土地というものを貨幣経済における商品として見なしていることとは対照的に、次の F 氏の語り

が注意されるべきである。

(4) F氏 安宿経営 男・40代

簡素な部屋が六つあるだけの安宿を経営する傍ら、午前中は妻と娘に任せて小学校の教師をしている。彼の所有する農園は、彼を含む三人兄弟に父が分与した土地である。父は祖父から受け継いでいる。彼の代になるまで、その土地がいかなるかたちであれ利用されたことはない。次に触れる女性でも言えることだが、サン・ペドロではこうして土地そのものを自分の代で少し拡張して、子供たちに分与するケースは一般的である。

したがって彼は、2000年に新たに土地を購入した。しかし特徴的なのは、整備されたコーヒー農園を購入したということである。ゆえにその価格は、彼の小学校勤務による給料の約二年分に相当する高額である。

さらにこの購入は、彼のそれまでのコーヒー栽培が大きな益をもたらしているのだから、さらに経営拡大に踏み切った、とは説明され得ない。現在の彼の経営収支は、採算割れをしていないという程度だからだ。しかし彼はこれは問題ではないと強調する。筆者は「Q30000もの大金を投じて、どのように経営の見通しを立てるのだ」と問うたときに、彼はその理由を述べた。「この農園は私のためにはない。息子たちのためだ。さらにこの購入を投資だとは思っていない。投資と見立てて回収を考えるならば、コーヒーでは難しいだろう。実際にはマイ・ホームみたいなものなのだ。そこには投資の回収というものはない。私の家だからだ…私はそこに少しばかり投資をしたいのだ…」。

もちろん彼にとってコーヒー農園とは、サン・ペドロで皆がやっているようにコーヒーを植え、収益を得るためのものである。しかしその営みそのもののなかに、彼が祖父→父→彼と受け継ぎ、また子供たちへと残していくものとしての土地が絡まっている。この彼のコーヒー栽培における土地との関係の持ち方は、R氏やG氏のような貨幣経済における商品価値的なそれとは異なるものである。

(5) C氏 伝統織物の講師 女・50代

最後に、C氏を取り上げる。サン・ペドロにおいて、収穫を除いてコーヒーの栽培に女性が関わることはない。収穫のみが、子供も含めて家族全員

で関わり、一種のお祭りのようになる場合が多い。彼女は古くに夫と別れ、子供たちを彼女一人で働いて育ててきた。22-3年前に偶然カナダからきた若い女性観光客との出会いをきっかけに、伝統織物を織ることを教えて職業としてきた。生徒の一人がホーム・ページで紹介したこともあり評判は良く、観光産業で儲けている人として村では有名である。

1988年に、たまたま少しまとまった現金を持っていたときに、知り合いに「少しばかり土地を持ちたいのだけれども」と持ちかけ、トウモロコシ以外彼女には考えられなかった山の急斜面を買った。

今でこそ彼女は、「自然の中を歩くことも好きだしネ」ということで積極的に自分の農園へ一時間ほど歩いて通っているものの、コーヒー経営者として自ら納得するには随分時間が掛かったと彼女は言う。購入した荒地地にコーヒーの植樹を薦めたのは弟であった。弟は現在スペイン語学校を経営するが、かつては行政の農業改良普及員のような職に就いており、コーヒーに関する知識もかなり深い。その弟が彼女に言った。「もしトウモロコシが嫌ならばコーヒーがベストだろう。もし何も栽培したくなくても、持っていれば将来売ることができる。買値より少し多く手にすることだろう。でも利用すべきだ。さらにはコーヒーを植えるべきだ」とのことである。世話のタイミングから労働力の調達まで全て弟任せで、費用だけを彼女が負担していた。

数年後、弟に「花が咲いているから実がとれるよ」と言われたが、なかなか信じられずに農園に行かなかった。織物教室が忙しかったこともあるが、買った土地から何か収入がもたらされるなどはまったく思っていなかったからだ。そのため弟は随分苛立って、最後には怒ったと彼女は言う。

強引に連れて行かれ一面の白い花を見たとき、彼女は言った。「ああ、神様。ありがとう」。彼女の態度の豹変に弟は笑い出したと言う。こうして彼女はコーヒー栽培に身を投じることとなった。

11年後の1999年、今度は完全にコーヒーを栽培する意図でもって農園をQ4000投じて購入した。これも決して小さな額とはいえないので、筆者は聞いた。「コーヒーの価格なんて不安定なのに、そ

んなに高価な土地を買ってしまったのでどうするのですか」。これに対して彼女は矛盾した言い分を持ってくる。「家にお金をおいておけば、盗まれるかもしれない…銀行に入れれば…うん…大丈夫だが、イロイロとやることがある。土地なら誰も盗まない…だから収穫がなくても問題ではない。決して土地は…。もし儲かればそれでよい。損をすればそれもよい。ひとつの宝クジみたいなものだ…人生のように」。農園をコーヒー栽培の観点から見れば宝クジであり、土地の観点から見れば銀行に預けるようなものとして捉えられているのである。

このように、彼女がコーヒー栽培へと乗り出したのは、「儲かるから」という確信をまったく抜きにしてのことだった。土地に財を残しておくといったことからであるが、これは商品としての認識ではなかった。女性であることが少なからず影響していると思われるが、コーヒーというものが何らかの利益をもたらすことを彼女が納得するのはかなり後のことであった。弟に無理矢理連れて行かれて一面に咲いた白い花を見た時から、彼女はコーヒー経営者として自己認識し始め、現在に至っている。

5. 終わりに

以上見てきた人たちがコーヒー栽培を続けているのは、「儲かっているから」と各々が自らのやり方で見なしているからである。だがその「儲かっている」という各々が自らに付与する合理性は、はたしてタックスが述べたような経済主義的な合理性として還元できるのだろうか。今後、この点をめぐって十分な議論を展開していくためには、コーヒーの浸透していない近隣他村との比較や、当村へのコーヒー浸透と村落の(近代的)諸変化との関係などをも射程に入れた¹⁵⁾、多面的な考察が必要となる。本論が十分な実証を行えたかは疑わしいが、それでも次のことは言えるのではないだろうか。

本稿取り上げた人びとと各々が、経験のなかで確信してきた「儲かっている」ことの内実が、多様であることは明らかだ。コーヒー栽培では、適当な手入れでもそれなりに収穫はもたらされる。この意味で、「儲かる」とは収入の多さだけではなく、その手軽さ(いい加減さ)にも起因している。だが、栽培の技術的な特徴に、「儲かっている」ことへの各

々における合理的多様性は還元できないだろう。栽培という行為が、各々にとって「儲かる」経験として認識可能たらしめているのは、コーヒーの作物のみではない。各々がどのように「コーヒーは儲かる」という経験に土地を取り込んでいるのか、この点は無視できないと考える。

ここで注意したい。コーヒーだけでは各々の「儲かる」バランスシートは導き得ないからといって、地価という項目をそれに足せばよい、ということにはならない。確かに G 氏のように土地を投機的な算段として顧慮している人もいるが、F 氏や C 氏において、土地とは貨幣経済の商品という意味に収まるものではないからだ。

しかしだからといって、これら土地の有する貨幣経済的な意味からの過剰を、“マヤにとっての土地”などと非歴史的に本質化させることにも問題があるろう。本稿の対象とはあくまで、ここで取り上げた人びとの、コーヒーとの新たな実践と経験のなかで再編されていく、各々における土地との関係である。“もしサン・ペドロにコーヒーが浸透せず、彼らも栽培に着手していなくても、村人はマヤであるから土地に固有の意味を込めている”ということを開くものではない。本稿の関心は、サン・ペドロにおいてコーヒーを現に栽培してきたこれら人びとのコーヒー栽培における行動規範を描くことにある。

サン・ペドロの先住民の人びとが置かれた経済的社会的文化的状況は依然として厳しい。2001 年、今まで人びとが経験したことのない程に、コーヒーの価格が暴落した。代わってトウモロコシがかつてのコーヒーのような価格を付けている。まだ、人びとはこの突然襲った危機的状況に対して、少し様子を見ているといった段階にあるが、なかにはトウモロコシの方が儲かるからコーヒーをやめようか、という人も出てきている。それでも、2002 年の筆者の調査でも、まだ実際に切り倒した人は確認されていない。これらが意味することとは、いつでも“トウモロコシの人間たち”に戻れる、という認識ではなからうか。

コーヒー経済というグローバルに展開する資本主義システムの直中で、サン・ペドロの人びとは自らの共同体を開き切った。ならば「コーヒーが儲かる」ということは、村人にとってあくまでも従属的

に与えられているものでしかないだろう。だからこそ、この「コーヒーが儲かる」ことを確信し経験するプロセスにおいて、「土地との関係」が重要なのだ。「コーヒーは儲かる」が、まったく将来的に“未知なるもの”であり、不安定な合理性である一方、土地に対しては、村人たちは、少なくとも自らの「歴史」を紡ぎあげてきたという、経験に基づく自信と安心を得ることができる。だからトウモロコシ畑に戻そうかというのは、伝統社会への回帰でもなければ、経営学的に選好された転作でもない。

最後に、以上の諸点から導き得るより広い文脈での学的可能性を提起しておきたい。2. に提示した(モラル・エコノミー)論争の両論いずれもが、対象たる農民の行動規範を、第三者たる外部観察者もが「客観的」に認識可能となる、伝統的規範あるいは経済合理的規範へと読みこもうとするものであった。しかしその何れもが、本稿取り上げた人びとの行動規範を、各々の論が「典型」として本質的に措定する規範からの「偏差」もしくは「逸脱」としてしか捉えることができない。これに対して近年、対象たる人びとの日々を生きる過程そのものに主体を措定することで、人びとの将来的な行動を先験的に決定する規範としてではないモラル・エコノミーをE.P. トムソンの論に読もうとする作業が始められている¹⁶⁾。サン・ペドロの人びとは、もはやウルフのたてる伝統的な行動規範に基づいてはいない。さらにタックスが導いた経済合理的なそれにも還元し得るものではない。しかしそれは人びとが非合理に栽培を展開してきたのではなく、各々にとって合理的な営みとして経験されてきたのである。この点から本事例は、2. での二項対立な両論陣が抱える問題をトムソンを梃子に乗り越えようとする学的試みへと、接続され得る可能性はゼロではなからう。

こうした方向への学的な展開可能性を示唆するものであると、本稿を位置づけたい。

注 1) 本稿、次の町村に対して略称を用いている。サン・ペドロ San Pedro La Laguna / サン・ホアン San Juan La Laguna / サン・パブロ San Pablo La Laguna / サンティアゴ Santiago Atitlán / サン・ルーカス San Lucas Tolimán

2) この認識論的な両極として、Scott (1976) と Popkin

(1979) の東南アジア村落に関する「モラル・エコノミー論争」も射程に含まれるべきだが、紙幅の都合上ウルフとタックスをその両極として紹介するに留まった。

- 3) グアテマラへのコーヒー導入が先住民共同体に及ぼした影響に関する歴史学的研究としては、(McCreery 1994, pp. 265-294; Smith 1990a, pp. 1-30; 1990b, pp. 259-263; Cardoso y Pérez 1977, pp. 226-229, p. 231; Cambranes 1986, pp. 204-212) を参照されたい。
- 4) この政権が 1954 年にクーデターによって崩壊して以降、1996 年まで軍隊支配の時代を経る。先住民たちは反政府左翼ゲリラと同一視され、拉致、拷問、虐殺の対象とされたが、本稿では十分に組み込めていない。虐殺行為を白日の下へと明文化する作業(例えば CEH 1999) ですら開始されたばかりであり、この間、先住民たちとコーヒーとの関係を扱う資料がきわめて少ないというのが理由である。キチエ県など中北部山岳地帯に限っては、Burgos (1985) が参考になると思われる。
- 5) また、1990 年代半ばから国営コーヒー協会(ANACAFE: Asociación Nacional del Café) は、五地域での高級コーヒー栽培に本格的に乗りだした。そのなかには先住民たちが多く暮らす地域、つまりウエウエテナンゴ県と、本稿の事例が位置するアティトラン湖周辺地域が含まれている。これはこれら地域での零細コーヒー栽培が広範囲で展開されていることを示している。だが当資料でも、先住民の歴史的文脈は踏まえられていない(ANACAFE 1995a; 1995b)。
- 6) 山間地域に事例を設定し、零細栽培の経営分析をおこなうこれら諸論は、数式で近代経済学的に捉えることに偏り、地域性や歴史性を十分に踏まえていない。コーヒーに関する経済学的研究が本稿であまり取り上げられていないのは、このためである。
- 7) アティトラン湖はグアテマラで最も有名な観光名所の一つであり、二十世紀後半頃から外部の(おもにアメリカ合衆国からの)人たちの別荘地としてパナハッチェルは転化した。今日では、中心地はほとんどが外部者の所有であり、他地域間との人的移動もきわめて激しい。
- 8) 後のパナハッチェルについては、Hinshaw (1975) が追加調査を加えて考察を展開しているが、ほぼタックスの見解を踏襲したものである。
- 9) 例えば、湖畔で取れる竜舌蘭は上質で、それをもとにつくられるマットやカゴなどの商品は広く知られていたし、復活祭の料理に欠かせないヒヨコ豆 garbanzo が生産可能なのは、これら地域に限られていた(McBryde 1945, pp. 88-120)。
- 10) すでにポールは 1960 年代頃のサン・ペドロが、「もは

- やトウモロコシが不足しているコミュニティとなった」と述べている (Paul 1968, pp. 104-105) が、それでもまだ“コーヒーが育つならば必ずコーヒーを植える”というまでの状態ではなかったことは、筆者が聞き取りから確認している。
- 11) 面積の単位。注意を要する。地域で用いられる際の当事者間での感覚に依存するため、殆ど「在って無いようなもの」である。「公式」な尺度でも、アティトラン湖湖畔の村落によって異なる。サン・ペドロで 1 c は 32×32 varas (26.88 \times 26.88 m で 722.54 m²) に相当する。隣町のサンティアゴではもう少し小さく、25 \times 25 varas が 1 c に相当する。また同じサンペドロ内でも時には 28 \times 28 varas が 1 c として用いられる場合もある (アナカフェ, サン・ペドロ支局での聞き取りによる)。
 - 12) すでに 1940 年前後の時期に、湖畔村落のなかでサン・ルucasだけの先住民は、50-80 c のトウモロコシ畑に加えて、20-30 c のコーヒー畑を所有していることが確認されている (McBryde 1954, p. 95)。
 - 13) サン・ペドロの住民によるサン・ホアンの農地の購入は、コーヒーがこの一帯に導入される遙か以前の十九世紀末にまで遡る。この点に関しては (Paul 1968, pp. 98-99) を参照されたい。
 - 14) 1999 年 5 月より現地で調査を開始したが、次節で引用した聞き取りは 2000 年 1-3 月に渡って行われたものである。
 - 15) この点に関しては、試論の域を超えないもの (中田 2002) を参照されたい。
 - 16) この筆者の観点は、例えば長原 (1998) に拠っている。
- 引用文献**
- [1] ANACAFE, *Hombres del café* (Guatemala: ANACAFE, 1995a).
 - [2] — *Caracterización de los cinco cafés regionales de Guatemala, Antigua, Atitlán, Fraijanes, Cobán y Huehuetenango* (Guatemala: ANACAFE, 1995b).
 - [3] AVANCSO, *Por los caminos de la sobrevivencia campesina I*, Cuadernos de Investigación No. 12 (Guatemala: AVANCSO, 1999).
 - [4] Burgos, Elizabeth, *Me llamo Rigoberta Menchú y así me nació la conciencia*, 14a. ed. (México D.F.: Siglo Veintiuno Editores, 1985).
 - [5] Cancian, Frank, “Political and Religious Organization”, in Manning Nash ed., *Social Anthropology, Handbook of Middle American Indians*, No. 6 (Austin: University of Texas Press, 1967), pp. 283-316.
 - [6] Cambranes, Julio C., *Introducción a la historia agraria de Guatemala 1500-1900* (Guatemala: Serviprensa Centroamericana, 1986).
 - [7] Cardoso, Ciro y Héctor Pérez B., *Centroamérica y la economía occidental (1520-1930)*, (San José: Editorial de la Universidad de Costa Rica, 1977).
 - [8] CEH (Comisión para el Esclarecimiento Histórico), *Guatemala, Memoria del silencio*, Tomo V (Guatemala: CEH, 1999).
 - [9] Demarest, William y Benjamin Paul, *Migrantes indígenas en la ciudad de Guatemala*, Seminario de Integración Social Guatemalteca, No. 27 (Guatemala, Editorial del Ministerio de Educación Pública, 1984).
 - [10] FUNCEDE (Fundación Centroamericana de Desarrollo), *Diagnóstico del municipio de San Pedro La Laguna* (Guatemala: FUNCEDE, 1997).
 - [11] Handy, Jim, *Revolution in the countryside: Rural Conflict and Agrarian Reform in Guatemala, 1944-1954* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1994).
 - [12] Hinshaw, Robert E., *Panajachel: A Guatemalan Town in Thirty-year Perspectives* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1975).
 - [13] INE (Instituto Nacional de Estadística), *Censos '94, X población-V habitación, Departamento de Sololá* (Guatemala: INE, 1996).
 - [14] McBryde, Felix W., *Cultural and Historical Geography of Southwest Guatemala*, Institute of Social Anthropology, Publication No. 4 (Washington D.C.: U.S. Government Printing Office, 1945).
 - [15] McCreery, David, *Rural Guatemala, 1760-1940* (California: Stanford University Press, 1994).
 - [16] 中田英樹「コーヒー栽培の導入と先住民共同体の変化をめぐり一考察—南部大規模農園地帯への出稼ぎ労働を手がかりとして—」, 『村落社会研究』第 9 巻第 1 号 (2002 年), pp. 23-34.
 - [17] 長原 豊「〈自称〉する人びとの歴史を記述する文体—主体を価値として過程的に術定する経験—」, 『思想』第 890 号 (1998 年)。
 - [18] Paul, Benjamin, *La vida de un pueblo indígena de Guatemala*, Cuadernos del Seminario de Integración Social Guatemalteca, Numero extraordinario (Guatemala: Editorial del Ministerio de Educación Pública, 1959).
 - [19] — “San Pedro La Laguna”, Flavio Rojas Lima y Sol Tax, eds., *Los pueblos del lago de Atitlán*, pp. 93-158 (Guatemala: Seminario de Integración Social Guatemalteca, 1968).
 - [20] Popkin, Samuel, *The Rational Peasant, the Political Economy of Rural Society in Vietnam* (Berkeley: University of California Press, 1979).

- [21] Scott, James C., 1976, *The Moral Economy of the Peasant, Rebellion and Subsistence in Southeast Asia* (New Haven: Yale University Press, 1976).
- [22] Smith, Carol A., "Introduction: Social Relations in Guatemala over Time and Space" (pp. 1-30) and "Conclusion: History and Revolution in Guatemala" (pp. 259-285), In Carol A. Smith, ed., *Guatemalan Indians and the State: 1540 to 1988* (Austin: University of Texas Press, 1990a: 1990b).
- [23] SNU (Sistema de las Naciones Unidas), *Guatemala: el rostro rural del desarrollo humano*, Edición 1999 (Guatemala: SNU, 1999).
- [24] Tax, Sol, *Penny Capitalism, a Guatemalan Indian Economy*, Smithsonian Institution, Institute of Social Anthropology Publication, No. 16 (Washington: United States Government Printing Office, 1953).
- [25] —, *The Towns of Lake Atitlan* [microform], Microfilm Collection of Manuscripts on Cultural Anthropology, No. 13 (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1946).
- [26] Thompson, Edward Palmer, *The Making of the English Working Class* (London: Victor Gollancz Ltd., 1963).
- [27] Wolf, Eric R., "Closed Corporate Peasant Communities in Mesoamerica and Central Java", *Southwestern Journal of Anthropology* 13, No. 1 (1957), pp. 1-18.

〈Agradecimiento〉

Me gustaría expresar mi agradecimiento sincero a todas las personas en Guatemala quienes me brindaron su gran favor para realizar este trabajo. Especialmente a las personas que colaboraron en mi entrevista y a Vicente y Samuel Cumes Pop. Por supuesto, sin embargo, tengo que cargar con todas las responsabilidades. Muchísimas gracias. (hidekinakata@yahoo.co.jp; Facultad de Agronomía, Univ. de Kioto, Japón)

(受理日：2003年2月3日)